

3. 分科会Ⅲ

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
「全国がん登録と連携した臓器がん登録による大規模コホート研究の推進及び
高質診療データベースの為のNCD長期予後入力システムの構築に関する研究」

平成 27 年度平田班分科会Ⅲ 研究会議 議事録

<議事次第>

日 時：平成 27 年 10 月 13 日（火）18:00－20:00

会 場：オフィス東京 2 階 L2 会議室

東京都中央区京橋 1-6-8 コルマ京橋ビル

出席者：50 音順

研究代表者	平田公一				
研究分担者	今村正之	岩月啓氏	沖田憲司	菊田 敦	固武健二郎
	小寺泰弘	佐藤雅美	佐野 武	杉原健一	藤 也寸志
	中村清吾	原 勲	藤原俊義	三木恒治	山本雅一
	横井香平	渡邊聡明			
研究協力者	石黒めぐみ（杉原健一）		大塚綱志（佐藤雅美）	瀧本哲也（菊田 敦）	
	宮崎達也（桑野博行）		向井博文（中村清吾）	吉富秀幸（宮崎 勝）	
事務局	水口 徹 今村将史				
欠席者	桑野博行 宮崎 勝				

会 議 次 第

18:00～18:05	研究代表者挨拶および分科会座長のご紹介	平田 公一
18:05～18:10	厚生労働省ご担当官のご挨拶 (ご欠席により中止)	健康局がん対策・健康増進課 藤下真奈美先生
18:10～18:15	分科会Ⅲ座長ご挨拶	杉原 健一 先生
18:15～18:30	ご発表 (1) 『分科会の研究目標と分科会相互の連関性について』	平田 公一
18:30～18:40	(2) 『各種学会・研究会における がん診療ガイドラインの評価の実績状況と発表状況』	沖田 憲司 先生
18:40～18:50	(3) 『神経内分泌腫瘍の登録体制への道のりと今後の展望』	今村 正之 先生
18:50～19:00	(4) 『小児がんにおける AYA 世代のがん登録の問題点』	菊田 敦 先生
19:00～19:10	(5) 『全国胃癌登録の実績・現況と登録データ利用上の課題』	佐野 武 先生
19:10～19:20	(6) 『大腸癌登録の現状と課題、打開策としてのデータ活用の展望』	杉原 健一 先生
19:20～19:30	(7) 『胆道癌登録の現状と課題』	宮崎 勝 先生 (吉富秀幸先生代理発表)
19:30～19:50	質疑応答	
19:50～19:55	今後のスケジュール（経理書類ご提出について）	平田 公一（代 及能）
19:55～20:00	閉会挨拶	平田 公一

議事要旨

平田主任研究者から、第一回班会議以降、第1、3分科会開催迄の経緯について概要説明があった。当該班は多人数の先生方で構成されており、その背景には以下の経緯のあったことが再確認事項として報告された。当初、厚生労働省から研究申請にあたって、キーワードとしてがん登録、診療ガイドライン、医療の質向上、などを掲げた研究申請要望がございました。その結果、上位の申請について統合が望ましいとのご示唆があり、該当研究責任者であった大阪大学外科教授森正樹先生と札幌医大外科教授平田との相談の結果、申請責任者を平田として最終正式申請をすることとなった。研究分担者については、両申請時の研究分担者間で分担研究領域が類似していても両申請時の研究分担者全員に研究に加わって頂くこととなった。第一回班会議後に班会議でお願いしたアンケートを研究分担者および一部の研究協力者の先生方に依頼したところ、全員からご回答を頂いた。その回答内容に準じて本班においては内容別に三分化会にて検討して頂くこととした。各分科会の研究内容については、本研究申請時の研究内容を鑑みて平田主任研究者から、この間、整理、明示させていただいてきたところである。各分科会の責任者については、各研究課題についてこれまでの研究内容・実績・経験を勘案して、分科会1:平田、分科会2:森正樹先生、分科会3:杉原先生、に担当頂くことを平田主任研究者の指名によって決定させて頂いている。分科会内で焦点を絞った検討を頂き、毎年三分科会間の横断的討論を行い、課題・提案を段階的に明示して研究者全員がその情報を把握し、班としての研究目標を到達させていきたい。困難点多々ありうるが現状の体制を一層前進させていくためにも、本研究を成就させていかなくてはならない旨の要望が述べられた。本日は分科会3に加わって頂いた分担研究者の中から、第一回班会議で未発表の方を基本に、それぞれの発表内容を基にご討論を頂きたい。

沖田憲司 先生のご発表が

タイトル「各種学会・研究会におけるがん診療ガイドラインの評価の実績状況と発表状況」にて、以下の内容をお示しされた。

各領域で実施されたがん診療ガイドラインアンケート調査の結果は、主に邦文論文として発表されており、総説、解説などでも利用されていること、がん診療ガイドラインに関連する前向き診療調査に関しては、現時点では、大腸領域における2報告のみが確認できているが、今後は多くの領域での発表が期待されること、がん登録データによる診療動向調査に関しては、現時点では、論文の中で診療動向の変化の解析を行っているものは多くはないが、現行のがん登録データからも、一部の診療動向の変化の解析は可能であると考えられるので、それらの解析の発表が待たれるとのご報告を頂いた。

上記の発表に対し、杉原健一座長より、胃癌領域などはもう少し論文があるのではないかと質問が成され、佐野 武研究分担者より、がん登録のデータそのものも用いた論文はほとんどないと回答が成された。

また、杉原健一座長より、乳癌学会における取組に関する質問が成され、中村清吾研究分担者先生より、これまでは費用の問題があり、がん登録のデータを用いた論文は多くなかったが、これからは学会で資金援助するので、今後は増えていくと考えられると回答が成された。更に、三木恒治研究分担者より、泌尿器領域における取組に関して、学会でデータ解析、発表の方法を決めて取り組んでいるとのご報告があり、それに対し、杉原健一座長より、一般の公募の研究は行ってないのかとの質問が成され、三木恒治研究分担者より、そのシステムはあり、今まで1つだけ公募による論文が発表されたが、あまり多くなく、学会主体の方が多いと回答が成された。

杉原健一座長より、大腸癌研究会では、がん登録を用いた研究の結果は、全て学会ホームページ上で確認できるとの報告が成された。

小寺泰弘研究分担者より、食道癌領域では、PubMedには載っていないが、レジストリーとして毎年報告していること、昨年、研究推進委員会が設立されたため、今後は報告が増えていくと考えられると報告が成された。

杉原健一座長より、平田班では、他の学会の取組を知る事ができるので、参考にすると今後の発展につながるであろうとのご意見が成された。

今村正之 先生のご発表が

タイトル「日本神経内分泌腫瘍研究会(JNETS)の発足とNET登録体制の現状」にて、以下の内容をお示しされた。

NETの特性に関して、臓器横断的であることや分類の変遷などをご報告頂いた。また、疫学調査の結果として、地域特性や非機能性NETの増加などをご報告頂いた。治療法についても肝転移も含めご報告頂いた。日本神経内分泌腫瘍研究会(JNETS)における、登録事業、ガイドライン事業、プロジェクト研究事業などに関してご報告頂いた。今後の専門医および専門施設の在り方についてもご報告頂いた。

上記の発表に対し、杉原健一座長より、登録に関して前向き登録であるかとの質問が成され、今村正之研究分担者より、2年遡って登録しているとの回答が成された。悉皆性を重要視しているとのご報告が成された。

更に、杉原健一座長より、内科系の登録についての質問がなされ、今村正之研究分担者より、内科系の登録もなされており、消化管学会などで情報提供しているとの回答が成された。

菊田 敦（瀧本）先生のご発表が、

タイトル「小児がんにおける AYA 世代のがん登録の問題点」にて、以下の内容をお示しされた。

日本小児血液・がん学会登録は現時点で最も精度の高い小児がん登録であると考えられるが、15 歳以上の AYA 世代の登録例数は少ない。この点は JCCG の小児固形腫瘍観察研究でも同様である。AYA 世代の登録率の向上を図り、本邦における罹患率を明らかにするとともに、治療成績向上とも連携できる登録システムが求められている。

上記の発表に対し、平田公一研究代表者先生より、がん登録に関して、親御さんが登録を拒否する人はいるのか？という質問がなされた。それに対して、瀧本哲也研究協力者より、98%同意される。という回答がなされた。また、佐野 武研究分担者より、全国がん登録で解決するのか？という質問がなされ、それに対して、瀧本哲也研究協力者より、悉皆性の点からは解決すると思われる。現在の地域がん登録では都道府県間の重複のチェックがなされていないため、倍ぐらいの疾患数になっている。稀少ながんのため病理学的中央診断により診断が異なることもあるので、全国がん登録で全ての問題が解決されるわけではないであろう。という回答がなされた。

佐野 武先生のご発表が、

タイトル「全国胃癌登録の現状と課題、打開策としてのデータ活用の展望」にて、以下の内容をお示しされた。

胃癌全国登録は 1969 年に開始され、中断をはさんで再開、継続中である。全国 250 以上の施設から、年間 2 万例以上の登録がある。Retrospective な任意の調査であり、胃癌の臨床病理因子と治療成績の概要把握、記述には有用だが、疫学的エビデンスは弱く、前向き研究には使えない。データベースは、探索的利用向けに公開されていない。2017 年に調査予定の 2011 年手術症例から、NCD との照合が可能となり、2022 年から全国がん登録との照合が可能となる。

上記の発表に対し、杉原健一座長より、膨大なデータはあるが利用価値は少ないことに対する質問がなされ、それに対し、佐野 武研究分担者より、新しいスタディーへのベースにはなるが登録データを利用して次々と論文が作れるわけではない、という回答がなされた。また、杉原健一座長より、NCD 登録はどうするかという質問がなされた。それに対し、佐野 武研究分担者より、項目が全然違うためデータ移行が大変である。学会としては細かなデータも継続していかなければならないと考えているため、今は離れているとの回答がなされ、杉原健一座長より、大腸癌登録に関しても NCD の利用を検討しているが答えは出ていないとのコメントがなされた。渡邊聡明研究分担者より、胃癌のデータベースを利用した生存率解析、胃癌登録によるインセンティブ、日本の全胃癌に対するカバー率に関する質問がなされた。それに対して、佐野 武研究分担者より、5 年生存率までの解析であること、インセンティブはないこと、2011 年の NCD の胃全摘症例に照らし合わせると胃癌全体の約 4 割をカバーしていると思われる、という回答がなされた。

石黒めぐみ先生（杉原健一先生）のご発表が

「大腸がん登録の現状と課題、打開策としてのデータ活用の展望」として、以下の内容をお示しされた。

大腸がん登録は大腸癌研究会の全国登録事業で、規約の作成が基幹事業である。目的としては、詳細な情報と予後情報を収集することにある。1980 年から開始されたが、過去の症例を登録する後ろ向きのものである。ファイルメーカーを使用して入力するが、登録数は 2007 年で 16 万 4 千例となっている。カバー率は年々減少傾向にあり、60-80 施設のハイボリューム施設からなり、全国の約 6%前後のカバー率と推測している。問題点としては、項目数が多く、提出する際に難点がある。今後は NCD を活用したいと考えており、現状の形式での登録意義に関して議論が出ている状況である。集計データを可視化することが望まれている。データ利用の条件として登録実績、研究計画、登録委員会の審査、倫理審査委員会が設置されていることなどの利用条件を定めている。2006 年-2015 年にデータを利用した論文は 16 件報告された。論文文化によるインセンティブを供与している。これらは治療法の変遷を可視化できており、今後もこれらのデータを可視化・利用化する方向である。

上記の発表に対し、杉原健一座長より、大腸癌のカバー率は7%程度で、項目が詳細なので、抽出数としては十分とも考えられるが、何とか増加させる取り組みを行っている。信頼動向調査を行って、ガイドラインの順守率を明示化しているとのご紹介があり、さらに佐野 武研究分担者より、(胃がんのがん登録)データの解析には、全国登録委員会の委員が論文作成時の共著者になるなどの規則を決めており、データの信頼性を高める努力をしているとのご紹介があった。これに対し、杉原健一座長より分析内容に関しては大腸癌研究会としては、責任を負わないとしているとのコメントがあり、横井香平研究分担者より、肺がん登録は5年毎に行っていますが、邦文と英文と双方で行っている。胸部外科学会ではAnnual reportを出しているが、これらの英文情報は引用回数が多いので、データ活用の方法として、英文で情報を残した方が良いと考えているとのご意見があった。

また、石黒めぐみ研究協力者より学会誌がないことが今後の課題であるとの御意見があった。

吉富秀幸先生のご発表が

「胆道癌登録の現状と課題」として、以下の内容をお示しされた。

現在は藤田保健衛生大学が事務局となり、堀口先生・石原先生が中心となって行われている。1988年から胆道癌外科研究会が中心となって胆道癌登録が開始されています。2007年から肝胆膵外科学会で引き継いでいる。登録後の予後調査は2年毎におこなっている。依頼施設は評議員施設、676施設である。調査項目は、患者背景、手術因子、病理因子、治療因子、予後の情報を収集している。新規登録症例は3500例程度で、20000例に対して20%のカバー率と推測している。2013年までに44000例の集積がなされている。77%は追跡している。生存率が向上している。

今後の課題を提示する。症例の偏り、データの活用について、NCDとの整合性に関してが課題である。どの領域のがん種においてもほとんどが手術症例で、内科系の症例が漏れていると推測される。非手術の症例を如何に増やしていくのか?が課題である。2点目は地域中核病院からのデータであり、抽出バイアスがある。データ活用という点では、5編の英文が報告されている。現在も論文をJHPBSに投稿中。

論文化のルール作成を行っている。学会で解析して、図表を渡す方向で調整しているものの決定ではない。他の学会との連携行っていきたい。NCDとの連携に関しては、今は考えていない。金銭的な問題とデータ活用の問題からNCD連携の課題である。

上記の発表に対し、杉原健一座長より、他の領域にも広げていくのかという質問がなされ、吉富秀幸研究協力者より内科系の学会として胆道学会との連携を勧めてくことを考えているとのご回答があった。

また、藤 也寸志研究分担者より解析に関して、第三者機関が行っていく点に関してはどう考えていくかとのご質問に対し、平田公一研究代表者より第三者機関との関連や関係性を透明化するシステムは日本にないが、すぐには出来ないが、何とか将来的に行うべき重要課題であるとのご意見があった。さらに、中村清吾研究分担者より、がん登録に関しては乳癌学会では2013年に認定施設の必須条件とし、認定施設は100%になった。データに関してはバイアスが生じるので、NCDに関しては正直に公表する必要があるとのご意見が成された。

■連絡：今後のスケジュールについて平田（代 及能）

事務取扱担当の及能より、研究費は12月までにご使用を完了し、1月末までに札幌医大に経理書類を送りいただきたいとの連絡があった。

■閉会の挨拶（平田）

平田研究代表者より、ご出席者への御礼がなされ、閉会となった。